

---

# 三匹のドラゴン その5

青木弘樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三匹のドラゴン その5

### 【Nコード】

N0623L

### 【作者名】

青木弘樹

### 【あらすじ】

ルドルバに武器をもらい、ドラゴン（フォックス）に最終決戦を挑んだブラウンとヘンリー。

しかしあと一步の所で戦力は尽きてしまう。

二人は強大な力を入れたフォックスに殺されてしまうのか？

物語はついに完結する…。

作：青木弘樹

「死ねええ！！」

もう駄目だ！二人は思った。

ブラウンは逃げなかった。今まで共に生きてきた親友を見捨てることなど出来なかった。

ブラウンは目をつぶった。ヘンリーは、ほとんど気を失っていた。しかしその時、

”ヒュン！”

何かの飛行物体がフォックスの目の前を通った。そして、

「あばよ、化け物……」

”ドカアアン！”

フォックスの目前で大爆発が起こった！

「！？」

ブラウンは目を開けた。

見ると、頭、左腕、左の翼を失ったフォックスがいた。そして、

”ズーン！”

フォックスは無言のまま、ゆっくりと地面に倒れこんだ。

「！？」

いったい何が起こったのか？

あたりを見渡した。あるものが目に入った。

なんとそれはルドルバが乗っていたスポーツカーだった。しかも空を飛んでいる！

そう。あの車のすごい機能とは、空を飛べることだったのだ。そしてルドルバは持っていたボムをフォックスにぶつけたのだ。

「ルドルバ！？」

ルドルバはゆっくりと車を着地させた。そして車から降りてきた。

「なんとか間に合ったな」

ルドルバは笑っていた。

「ルドルバ！」

「よお。待たせたな。真打ちは最後にやってくるからな。まっ、よくやったよ、お前ら」

その後、警察と軍隊もやってきた。

ルドルバは面倒はごめんなので、さっさと帰っていた。

ヘンリーは救急車に乗せられ、病院に運ばれた。

ブラウンは警察に事情聴取を受けるため連行されたが、間もなくして解放された。

ドラゴンは退治され、町に平和は戻った。

数日後。

「ほら。約束の500万だ」

「サンキュー」

ルドルバはうれしそうだった。

「まあ今回はお前に助けられたことだし、大目に見てやるよ」  
ヘンリーが言った。

「いつでも言ってくれよ。金さえもらえれば助けてやるからよ」  
「けっ」

そう言いながらも、ヘンリーもルドルバも笑顔だった。

「さてと…俺はワシントンに戻るよ」

「え？」

「この研究所は二人にやるよ」

「ええ？」

「ここはただの仮住まいだ。お前ら、研究所壊されたる？だからやるよ」

「いいのか？」

ブラウンが聞いた。

「ああ。特別大サービスだ」

「あんた。いいところあるじゃない」

イザベラが言った。

「ほれたか？」

「はあ？そんなわけないでしょ！」

「ははは」

四人は笑顔だった。

「じゃあな」

ルドルバは例のスポーツカーに乗り込んだ。

「ルドルバ、ありがとう。またいつか会おう」

「今度は化け物はなしで頼むぜ」

「ははは、分かった」

「じゃあな」

ルドルバの車はゆっくり浮かび上がった。

”ヒューーン！”

車は空のかなたへと飛び立っていった。

「まったく…生意気なやつだったが、まあ、認めざるを得ないかも  
な」

「ああ。あいつは天才さ」

「でも、結婚はしたくないタイプね」

三人は笑顔だった。何かをやり遂げた満足感もあった。

「なあイザベラ」

ヘンリーが唐突に切り出した。

「なあに？」

「お前、ここでブラウンと一緒に暮らせよ」

「えっ？」

「ブラウンは…ずっとお前が好きだったんだよ」

「へ、ヘンリー…」

「んでお前が今住んでいるところに俺が住むよ。どうかな？」

「そ、そんなこと急に言われても…」

イザベラは突然の話で、戸惑っていた。

「ブラウン」

ヘンリーはブラウンに合図した。今こそ気持ちを伝えろと。

「…」

ブラウンはうなずいた。

「イザベラ、ここで一緒に暮らそう。必ず君を守るから」

「ブラウン…」

イザベラは迷った。しかし、

「うん…いいよ…。ありがとう、ブラウン」

イザベラは照れながらも、うなずいた。

「ありがとう」

ブラウンは喜んだ。

「よし！決まりだ！よかったなブラウン」

「ああ…ありがとうヘンリー」

こうして、物語はハッピーエンドを迎えた。

—————

しかし…

ある女性が、ラリオス博物館に飾ってあるドラゴンの死体の写真を見ていた。

ここはすでに違う人物が館長になっていた。

「…」

その女性は涙を流していた。女性は何やら小瓶を持っていた。妙な緑色の液体の入った小瓶を…。

そしてその女性はつぶやいた。

「あなたのかたきは…きつと私が…」

T  
H  
E  
·  
E  
N  
D

(後書き)

ありがとうございました。

青木弘樹

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0623/>

---

三匹のドラゴン その5

2010年10月9日06時16分発行